

# 松本清張記念館

◆館報◆  
2005.12  
第20号



初単行本『日本の黒い霧』文藝春秋新社  
I 昭和35年5月発行、II 昭和35年9月発行、III 昭和36年3月発行

それぞれの事件は、  
それ自体の解剖では  
実態の究明にならない。

『日本の黒い霧』は「文藝春秋」昭和35年1月号から12月号まで掲載された。

「下山国鉄総裁謀殺論」「『もく星』号遭難事件」「二大疑獄事件」「白鳥事件」「ラストヴォロフ事件」「革命を売る男・伊藤律」「征服者とダイヤモンド」「帝銀事件の謎」「鹿地亘事件」「推理・松川事件」「追放とレッド・パージ」「謀略朝鮮戦争」の章からなる。

現在入手できる本  
『松本清張全集』第30巻（文藝春秋）  
『日本の黒い霧』上・下 文春文庫（文藝春秋）

## 目次

- 開館七周年記念講演会
- 佐木隆三講演会……………2
- 下関紀行……………4
- 企画展紹介「松本清張文学と中近東」……………5
- 清張原風景「点描」……………5
- 展示品紹介……………6
- 探検！清張記念館……………7
- 友の会活動報告……………7
- みんなの広場……………8
- トピックス……………9

## 作品紹介

十二の章にわたって、敗戦直後の七  
年間、まだ米軍の占領下にあった時代  
に起きたさまざまな怪事件をとりあ  
げた作品。「一九六〇年「文藝春秋」に  
掲載された。

前年「小説帝銀事件」執筆の折、清張は帝銀事  
件にはGHQがからんでいることに思い至る。しか  
し小説という形態では「客観的な事実が混同され、  
真実が弱められ」と考え、この『日本の黒い霧』  
ではノンフィクションという形を取る。残された資  
料を詳細に読み、空白の部分Ⅱ事件の謎Ⅱを独自  
の「史眼」で推理しながら、歴史の真実に迫った。

清張は下山国鉄総裁怪死事件や、戦後最大の  
贈収賄事件となった昭和電工事件などの解決を  
阻んだ背後の壁には、GHQの影があると疑った。  
GHQ内部の対立も見据えつつ、当時の東西冷戦  
構造とアメリカの極東政策の変化も視野に入れな  
がら事件を追った。

まだ事件の記憶が新しく、さらに安保闘争のさ  
なかで日米関係に関心が高まっていたこのころ、『日  
本の黒い霧』は衝撃をもって受け止められた。「黒  
い霧」という言葉は流行語となり、いまでも広く使  
われる。

続いて近現代史をテーマにした『現代官僚論』  
『昭和史発掘』のみならず、古代史の世界でも、清  
張の「史眼」は、生涯にわたって鋭さを失わなかつ  
た。

（学芸員 小野 芳美）

# 開館七周年記念講演会

開館七周年記念として、佐木隆三氏が講演を行いました。

これに先立ち、記念館オリジナル映像の第三弾「日本の黒い霧——遙かな照射が初公開されました。」



## 「清張文学の最高傑作『黒地の絵』」 佐木隆三

今日は「黒地の絵」の話なので、私も黒いシャツを着てきました。

この作品と関係がありますから、私自身の話からいたしますと、昭和十二年に、現在の北朝鮮の咸鏡北道で生まれましたが、太平洋戦争が始まり父が海軍に召集されたのを機に、日本に引き揚げて参りました。関釜連絡船から初めて見た祖国は真冬の関門海峡で、とてもきれいだったのを覚えています。父がフィリピンで戦死し、母子家庭一家で、昭和二十五年六月に、広島県の郡部から親戚を頼つて八幡に参りました。八幡の町は製鉄所の始業・終業時にサイレンが鳴り響いておりましたが、それとは違う空襲警報が鳴って、「空襲警報はこう鳴ります」という回覧板が廻ってきました。

ました。新聞記

事にも出なかつたよつで日付を確かめようがなかったのですが、最近、岩波書店の「近代日本総合年表」で昭和二十五年六月二

十九日だったのだと判りました。朝鮮戦争の影響で、板付基地および小倉・八幡・門司・戸畑市に空襲警報が発令された、とあります。この年の七月十一日に、「この『黒地の絵』の事件がありました。」

私は復帰の前後に沖縄で暮らし、沖縄戦に関する聞き書きをしたことがあります。昭和二十年四月一日からのアメリカ軍の上陸開始を遠くから見た人は、皆「黒い皮膚のアメリカ兵が一斉にわっと上陸してきた」と言っていますね。アメリカの人口比では黒人はおよそ10%で、当時は徴兵制だから軍隊でも同じような構成だと思っんですけど、十分の一にすぎない黒人兵が沖縄戦では最前線に投入されていた。これは沖縄戦から五年経った朝鮮戦争の「黒地の絵」も同じで、指揮官は白人で兵隊は黒人です。

六月二十五日に朝鮮戦争が始まって、七月十日に岐阜からジウノキャンプに送られてきた兵隊たちは、自分たちが朝鮮に運ばれるのを皆知っている訳ですね。真先に敵弾の飛んでくる方に向かうことになる、本当に絶望的な状況だっただと思っんです。あの部隊の若者たちがどれだけ「どうせ俺たちは朝鮮に行ったら生きて帰れないんだ」という不安に囚われていたであらうかということが、「黒地の絵」にきちんとかかれています。結果として起きた凶悪事件は憎んであ

まりある犯罪です。しかし脱走してそのような恐るべき犯行を行った若者たちの絶望的な状況も同時に分かります。

先ほどの映像のナレーションでも出ておりましたけど、本当は彼らは軍法会議にかけられるのを望んだと思えますし、そのために脱走したという見方だってできます。軍法会議も普通の刑事裁判とやり方は同じですから、全員が銃殺刑になるとは限らないですし、裁判の間は肉親に手紙を書いたりすることもできる。しかし有無を言わず門司港から輸送船に乗せられて、朝鮮戦争の戦線に送られました。ジウノキャンプから脱走して朝鮮戦争に行つたけど無事帰還したという人の話は全くありません。いろんな資料を見ましたが、人数も不明で、本当のことは軍事裁判も行われていないから知ることができないですね。被害にあった人々も文字通りの泣き寝入りで、何の補償も受けられなかった。二重三重の悲劇です。

「黒地の絵」は、朝鮮戦争の戦況を伝える外電から始まり、アフリカ系アメリカ人という風に黒人のことを言いますが、太鼓のリズムで彼らの「血が騒いだ」と書いておられます。絶望と不安の中で何かをせすにはいられないのが、言ってみれば脱走の動機で太鼓の音に目を向けているのが、いかにも清張先生らしい発想だと思っんです。

小倉祇園太鼓は岩下俊作さんの「富島松五郎伝」(映画「無法松の一生」の原作)でも描かれています。昭和四十八年に、岩下さんに「『黒地の絵』の、太鼓の音で黒人兵の血が騒いだというのをどう思われますか」と聞いたら、にやっと笑って「うーん、いかにも清張さんらしいなあ」と肯定も否定もしておられませんでした。岩下さんの弟さんが清張さんと小学校の同級生だった関係で、清張さんは戦後小説を書くとき岩下さんを訪ねて、原稿の感想や批評を聞いていたといつていいです。



私は昭和三十一年に八幡製鉄所に入ったんですが、同じ社員だった岩下さんのお宅での勉強会に通うようになり、日曜日の午後一時くらいに集まって、自分で書いた原稿を一人づつ朗読し、それに対する批評感想を述べあう。二、三時間位して、夕方になったらお酒を飲み始めるわけですね。清張さんも昭和二十八年の暮れに上京される前、来ておられたそうですが、作品の批評をしようのはお好きだったようですが、お酒を飲まない方で、その後の宴会がいやで、いつの間にか来られなくなりました。私がいたときも「清張さんは確かにいい人だ、作品もいい。ただ欠点は酒を飲まない」とだよ」と話題になっていました。

私は昭和三十一年の東京オリピックの年に小説家になるといって会社を辞め、四十二年に上京しました。そしてら編集者を通じて、「清張先生のお宅に行ったら、『佐木隆三』というのが最近北九州から出てきたようだけれども、うちに遊びに来るように言ってみようか」という話を聞いたので、電話をかけて伺ったんですね。地元では清張さんとは不遇でいい思い出がなかった郷里を嫌っている、という噂が流れ



### 佐木 隆三

#### ■プロフィール

昭和12年朝鮮生まれ。八幡中央高校卒。39年まで八幡製鐵に勤務。38年『ジャンケンポン協定』で新日本文学賞、50年『復讐するは我にあり』で直木賞を受賞。現実の事件に基づいた犯罪小説を多く手掛り、社会派作家の第一人者として活躍中。

平成11年度北九州市民文化賞、平成15年度福岡県文化賞受賞。

#### ■主な著書

『小説大逆事件』『法廷の内と外で考える』『音羽幼女殺害事件』『勝ちを制するに到れり』『海燕ジョーの奇跡』『身分帳』（平成3年伊藤整文学賞）『宿老・田中熊吉伝』など。

ていたんです。でも私は八幡から東京に出たというだけで呼んでいただいて。おそろおそろ伺ったら応接間に通され、岩下俊作さんや劉寒吉さんはどうしているかと懐かしそうにお聞きになりました。驚いたのは「お母さん元気？」と仰ったときです。おそらく私が当時書いていた私小説のようなものを読んでくださったかと思うのですが。一時間くらい経って、こんな流行作家のところに長居をしておいてはいけなと帰ろうとすると、「いつでもまた来なさいよ。僕は文壇つきあいというのがないから、またおいで」と仰っていただきました。

一ヶ月くらい経ってまた電話して伺うと、今度はずいぶん待たされ、真つ赤な目をして出てこられたんです。「いや、帝銀事件について妙なことを書くやつがいたから、急遽それに対する反論を徹夜して書いていたんだ」と仰るわけですね。本当に疲れ切っておられて、それでも約束通りお会い頂いたのが申し訳ない、と、そそくさと帰り支度をしたら、「ちよと待ちなさい」と、「少年犯罪について」というような本を五冊用意してください」と、「それいつでもいいからね、読んでおくといいと思うよ」と仰った。お忙しいのに申し訳ない

という気がして、二回おじゃましたきりなんですが、郵便で送り返すこともなく何十年か経ってしまっていて（会場笑い）。さすがに良心がとがめて、万引きの犯人が自首するような気持ちで（会場笑い）、清張記念館にお返しにあがったら、館長がぱらぱらと「らんになって」「これは大変貴重な本ですよ、やっぱり佐木さんのことを思って清張先生はお貸しになったでしょうね」と。私が犯罪小説を書くようになるのはその数年後なんですけど、それまでは私小説をずっと書いていたんですが、一回目に伺ったときに話を聞いてくださって「この男は罪を犯すことを書くだろう」と思ってお貸し頂いたのかと、今になって思いました。なんとなく本場に遙か清張先生の後ろの方を歩いて、小さな歩みでありますけど、あのときあの本をお借りしたということが自分の方向を決めたと思ったりしております。

松川事件は、第一審では十人に対する死刑判決が出ました。これはひとりの自白がもとになったのですが、取り調べをする取調官というものは、裁判所が逮捕状を許可しているわけだから「疑うに足りる相当な理由がある」と確信を持って取り調べ、逮捕した以上は自白させねばならないと、やっていけないことも自由に追い込んでしまふ。清張さんは松川事件に取り組まれる前から、「疑う」ということに対して、待てよ、それでいいのかという視点をお持ちで、ほかの小説でも発揮されていた。清張さんが松川事件に取り組まれたのは、やっていけないことも自由に追い込まれるんだというところからです。昭和三十三年に「黒地の絵」を書いて、その後、三十五年に「推理・松川事件」を含む「日本の黒い霧」シリーズの連載が始まる。ですから「黒地の絵」は「日本の黒い霧」シリーズのとうっかりと言えるのではないのでしょうか。ですから私は「黒地の絵」は、清張文学の最高傑作だと思っています。

# 下関紀行

清張原風景「点描」下関編 連載を終えて

下関は本州の最西端、九州の門司港、小倉の間に関門海峡がはしります。

関門海峡は、日に四度流れを変え、その潮流の速さからまるで川が流れるように見えることもあります。大小様々な船舶が日に六百隻余りも通過するといわれ、見る人の目を楽しませてくれます。

また、関門海峡は古くから幾度となく歴史の舞台に登場してきました。源氏に敗れた平家滅亡の地、武蔵・小次郎の対決、幕末における志士たちの活動など、今も多くの史跡が下関に残されています。

松本清張は、今から九十年余り前、この関門海峡に面した壇ノ浦で幼い日をすごしていました。壇ノ浦は、対岸の門司港・和布刈までの距離がわずかにキロと、海峡の幅が最も狭くなった海の難所です。「時間の習俗」の舞台として登場する和布刈神社をはつきりと見ることが出来ます。壇ノ浦にある「みもすそ川公園」には、清張の文学碑も建てられています。「ここから国道をはさんで北側に火の山があります。標高わずか二百六十八メートルですが、関門屈指の眺望を誇っています。

「御裳川橋は朱塗りの欄干になっているが、その袂あたりの小公園が、ほぼ七十年前には、八軒ばかりの家が長府街道に一直線ならび壇ノ浦の東端だった。そこから西へ三十メートル寄って道路がわずかにカーブする。そのあたりが西端であった。旧壇ノ浦はま



とに短い集落であった。」「骨壺の風景」七十歳の清張が振り返った旧壇ノ浦です。

さらに国道沿いに西に進むとわずかで関門橋、壇ノ浦の合戦に敗れ入水した安徳天皇を祀る赤間神社、日清講和条約が締結された春帆楼、幕末の攘夷戦で砲台が築かれた亀山八幡宮と続きます。その途中には、赤間神社や亀山八幡宮への祭の返り、母親の背中で清張が「おかんあれは何かん」と訊ねた潮流を検べる施設も「円錐形の赤茶けた岩」（烏帽子岩）も昔のまま海峡の波打ち際に立っています。

壇ノ浦から逆に東に行くと長府に続きます。もともと長門の国の国府が置かれた長府は古い歴史を持ち、国宝となっている功山寺のほか多くの旧跡があります。乃木神社もその一つです。「一度、近所の人力車に乗せられて乃木神社に父といっしょに行ったことがある。煎餅が何か買ってもらったが、それが私の幼時の最大の贅沢であった。」「半生の記」

清張が下関で過ごした日々から一世紀近く、主に亀山八幡宮のある唐戸地区ではウォーターフロント開発が進み、水族館「海峡館」、レストラン、お土産品店などの多彩なエリア「カモンワーフ」が整備され、多くの人で賑わっています。記念館友の会の会員と清張ゆかりの地をたずねた日はあいにくの冷たい雨でしたが、一度皆さんもおとつれてみてはいかがでしょうか。（中野 吉明）

# 松本清張文学と中近東

小説に読む考古学



赤鹿形象土器



女神文水注

期間：平成18年1月21日（土）～3月31日（金）

会場：記念館地階 企画展示室

松本清張はその独自の「史観」から「考古学もの」、「古代史もの」などと呼ばれる作品を数多く生み出しました。特に「考古学もの」では、作品中に考古学の遺物や遺跡を多彩に活用しています。それは日本のみならず中近東の考古資料にまで及んでいます。

本展では、「考古学」や「中近東」をその題材に扱った作品と作中に使われている考古遺物などの展示を通して、まとめて紹介されることの少なかった、清張文学における「考古学もの」、「古代史もの」の世界に光を当てます。

なお、今回は中近東の考古学を専門に研究する財団法人中近東文化センターの協賛を得、展示品等全面的な協力を頂きました。



天体観測儀

## ● 作品と作中に使われた考古学遺物 ●



シリンダー・シール(イラク)



コプト(エジプト)

(中近東文化センター所蔵)

「これはね、紀元前三千年くらいのアッシリアの紋章です。当時の王さまや貴族がそれぞれの紋章を職人に彫らせて、印形がわりにしていたんですね。(中略)シリンダー・シールといいましてね。蒼黒い石が閃緑石で、白っぽいのが大理石です」と、原島はうれしそうに説明した。(中略)

玄関の壁に、小さな額がかかっていた。はめこんでいるのは画ではなく、エジプトの古代織の残欠である。植物文様の中に天使が二つ、翼をひろげて飛んでいる。人物像のついたコプトは値が高いのだ。(「礼遇の資格」、「小説新潮」1972年2月)

## 清張原風景

# 点描

## 古船場

「父がようやく家に戻り、小倉に移ることに話が決った。小倉の古船場という町に風呂屋があって、その風呂焚きをしている奥田という知合いの老人を頼ったのである。この夫婦はひどく善人で、亀井という雇主からも信用されていた。住居は風呂の裏手にある六畳二間ぐらいの家で、多分、風呂屋の主人にタダで住まわせてもらったのだろうが、その一間を私たち親子三人が間借りすることになった。」(「半生の記」)

出生後、下関に移り住んだ清張一家が再び小倉に戻り、最初に落ちついたのが古船場である。以後応召の時期はあるものの、芥川賞受賞を契機として昭和二十八年に上京するまで、三十数年を小倉で過ごしている。

一家が再び移り住んだ大正期の小倉は、第十二師団司令部や陸軍小倉兵器製造所などが置かれ、城下町としての面影と軍都としての性格を併せもっていた。

古船場町は、江戸初期の小倉を統治した細川氏の時代、藩軍船の繫場であったことから船場町と称され武家屋敷が建ち並んだ。その後、細川氏に代わって小倉に入った小笠原氏の時代には新たに別の場所に藩軍船の繫場、船場町が形成され、古船場町と称されるようになったといわれている。



古船場町の名前は、今も残っているが、小倉駅の開業に伴い整備された平和通りの開通により分断され、清張が住んだ古船場は魚町四丁目となっている。(中野 吉明)

著「富島松五郎伝」(昭和五十六年中公文庫で解説を執筆した清張は、そのなかで古船場町について次のように書いている。「木賃宿などがならび、しがた暮しの人々が住んでいた。屋根の低い、狭い家々は陰鬱で、道はいつもじめじめとしていた。」

## 展示品紹介

# 「或る『小倉日記』伝」掲載の三田文学

「或る『小倉日記』伝」は、周知のとおり芥川賞受賞作品であり清張にとっては出世作ともいえる。初出は「三田文学」。「西郷札」の入選から「或る『小倉日記』伝」の芥川賞受賞までは、不思議な幸運が清張を後押しした。



昭和27年9月号

「三田文学」に掲載された「或る『小倉日記』伝」。誤植で作者の名前が「清張」ではなく「情張」となっている。「上京したとき編集の熊谷さんという女性は申しわけないと謝りました。しかし誤植で縁起がよかつたのかもしれない。」と「運不運 わが小説」で回想している。



この入選作（「西郷札」※筆者注）が雑誌に載ったというのが私の幸運であった。そのために、その期の直木賞候補にもなった。木々高太郎氏に掲載誌を送ったのも、活字になったればこそである。ナマ原稿なら送る勇気はない。（略）これが縁で木々氏編集の『三田文学』に小説を二つほど書かせてもらい、あとの一つが運

よく芥川賞になったのだった。わたしのような者にも運はくるものだと考えた。（受賞は運によるところが大きい）  
※傍点筆者  
（『西郷札』のころ）

「運」は、慶応義塾に縁もゆかりもなかった清張を「三田文学」に結びつけた。当時清張は、木々が「三田文学」の編集をしていたことも知らなかった。何か書くようにと言われ送った「記憶」（のちに「火の記憶」と改題）が同誌に発表され、恐縮した清張はへもつと文学的なものをもつて（「自伝抄 雑草の美」）「或る『小倉日記』伝」を書いた。編集部に送った後も文章が気になつて原稿に手入れをしている。「文藝春秋」に再録の際は、この二回目の原稿を掲載してもらった。

木々氏はどういふつもりか、私を「三田文学」の編集委員にされた。ほかに和田芳恵さんが「任命」された。和田さんも慶應とは縁もゆかりもない。（略）編集委員の下に編集実行委員（という名だったと思う）が、はっきり憶えていない）が四人置かれていた。山川方夫、田久保英夫、江藤淳、林峻一郎の諸氏で、いずれも慶應出の若手だった。

（「運不運 わが小説」）  
いずれにせよ、初めて書いたに近い小説でデビューした頃から作品に備わっている筆力とともに、作家の持つ強運を感じずにはいられないのである。

（学芸員 柳原 暁子）

## 老よしとハルコの探検！清張記念館

### 1F パネル「松本清張カメラアイ」の巻

**きよし** へー、これ全部清張が撮ったのか。いろいろな国に行けていいなあ。

**ハルコ** 海外への取材旅行は20回以上になるそうよ。当時の編集者の話だと、ひたすら取材に明け暮れて観光どころじゃなかったみたい。あまり楽しくはないかも。

**きよし** 本当に作品に対して真剣にとりこんでたんだね。それにしてもどれも雰囲気のあるいい写真だな。

**ハルコ** プロの写真家も一目おく腕前だったようよ。元デザイナーだし、美的感覚がすごくあるんでしょうね。白黒フィルムもいつも持って行ったようだし、資料のためだけでなく趣味としてもずいぶん撮ったんでしょうね。



キューバのカストロ首相の演説も写っています

**きよし** でもこの行動力と好奇心は、趣味では片づけられないよ。写真から何事にも全力で取り組んだ清張自身のエネルギーが伝わってくるよね。

**ハルコ** いつも誰かがピースしている写真しか撮らないきよしくんには清張も言われたくないでしょうね…。

写真ひとつひとつに、清張の視線を感じてください。ファインダー越しに清張の見た風景がそこにあります。パネルは、再現家屋・応接室横にあります。（読書室では清張撮影の写真を集めた「松本清張写真集」も閲覧できます。あわせてお楽しみください。）

今回は、最近お寄せいただいたアンケートの中から、清張作品の魅力について  
のご意見を掲載しました。

## みんなの広場

- ・「砂の器」は世の中の無理解、差別、物事を知らないおそろしさを感じる。清張さんの作品は世の中の弱い立場の人の目線で書かれているので受け入れやすく尊敬できます。時代が変わっても、人は幸せになる権利があり、どんな人間でも差別してはいけないと思う。(50代・宮城・女)
- ・すべて愛読しているが、古代史を推理するエネルギーは現代のいかなる文学者や研究者をはるかにしのぐものがあり、魅了されている。  
(60代・千葉・男)
- ・身の回りに起きたこと、起こりうることをモチーフにした清張の作品は、庶民性故に常に人の関心を引くのだと思います。  
(50代・愛媛・男)

- ・やはり「ゼロの焦点」や「点と線」ですが、学生時代に読んだことのある「或る『小倉日記』伝」を最近再読して、涙が出るほど感動しました。清張さんは人間の弱さや強さを描いているなあと思います。(30代・群馬・女)
- ・若い時、夢中で読み感動した思い出があります。帰ってから又読みなおします。映画・テレビもよいのですが、時間をかけてじっくりと読みこんでいくと、時代背景、作者の思い等みえて来て、味が出てよいものです。(50代・岩手・女)

このコーナーでは、アンケートなどでお寄せいただいた意見等をご紹介します。

清張や作品に対する思い、エピソードなど何でも結構です。皆さんの「声」を是非、記念館までお寄せください。

※アンケートは館内にも置いてあります。

## 友の会 活動報告

### ● 平成17年度年次総会(8月4日(木):参加者 52名)

松本清張記念館企画展示室にて平成17年度年次総会を行いました。

任期満了に伴う幹事の改選と設立5周年記念誌発行に向けた新たな幹事体制、平成16年度事業及び決算報告、平成17年度事業計画及び予算案などについて審議され、いずれも承認を受けました。

### ● 第9回清張サロン(9月17日(土):参加者 28名)

会場:リバーウォーク北九州・朝日さんさん広場

松本清張記念館の中野企画係長の講師で企画展「黒地の絵 一刻まれた記憶」をテーマに、清張サロンを行いました。「黒地の絵」を書いた動機、題材となった黒人兵集団脱走事件などについて講義が行われ、地元小倉と関係が深いこともあり、参加者の関心も高いようでした。サロン終了後は記念館に移動して、企画展を見学しました。

### ● 下関文学散歩(11月11日(金):参加者 40名)

今回は、過去に館報の連載記事「清張原風景点描」で取り上げた下関市の清張ゆかりの地を訪ねました。川北電気給仕時代に取材に訪れた中山神社、幼少を過ごした田中町などの他、幼少の頃祭りで訪れた赤間神宮・乃木神社、そして清張の文学碑がある壇ノ浦「みもす川公園」などを訪問し、清張の足跡に触れることができました。



## 友の会会員募集!!

ただいま友の会では新規会員を募集中です。松本清張記念館友の会では清張ゆかりの地の見学や読書会・講演会等の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。

会費は、8月から翌年7月までの1年間を1会計年度とし、年会費3,000円となっています。

#### ■友の会事業

- ・講演会・シンポジウム等の開催
- ・映画ビデオ等の上映会の開催
- ・読書会・文芸講座等の開催
- ・会報の発行
- ・松本清張ゆかりの地、他都市の文学館見学事業の実施 など

#### ■会員特典

- ・常設展の招待券(年間4枚)進呈
- ・友の会主催事業のご案内、会報の進呈
- ・企画展(年2回)のご招待
- ・友の会オリジナルグッズの進呈(加入年度のみ)
- ・記念館主催事業のご案内・参加
- ・喫茶「石の館」(記念館内)の飲食料金1割引
- ・記念館広報誌(館報)・企画展図録進呈

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

平成17年度

## 館務実習 報告

松本清張記念館では例年、学芸員資格を取得する学生の館務実習を受け入れています。平成17年度の実習は8月16日から25日でした。今年、当館では初の試みとして実習生によるミニ企画展を開催しました。そのため実習生は6月から企画書を作成し、会議を重ね、作業を分担して実習期間以外にも業務にあたりました。



企画展は『点と線』を点と線で結ぼう!というタイトルで、地図上に犯人の行動を記入することができたり、昭和30年代の暮らしを写真や資料で紹介したり、東京駅ホームを模型で再現するなどユニークな展示となりました。「夏休み子供向け企画展」という難しい課題にもかかわらず、実習生は自分たちの力で展示を初めから終わりまでやり遂げました。その他、学芸員の地味で膨大な雑務も、数日ではありますが経験し、少し大人になったようです。



イラスト:山藤 章二

編集・発行

## 松本清張記念館

〒803-0813  
北九州市小倉北区城内2番3号  
TEL 093 (582) 2761  
FAX 093 (562) 2303  
<http://www.kid.ne.jp/seicho>  
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)  
小学生/200円(160円) ( )は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分  
小倉駅からは100円バスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)  
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

## 松本清張研究会 第13回研究発表会

平成17年12月3日、松本清張研究会「第13回研究発表会」が、北九州市立大学で開催されました。関東会場が多い研究発表会ですが、4年ぶり2度目の北九州開催とあって、遠方、地元から会員をはじめ多数の友の会会員や一般の方など約70名の参加があり、会場は熱気につつまれました。

講演は、梅光学院大学教授の小林慎也氏が『記憶の風景—松本清張の小倉時代—』、研究発表は、北九州市立大学助教授の重信幸彦氏が『「採集」する身体へ—「清張」・小倉そして民俗学—』と題して行いました。いずれも松本清張の小倉時代に焦点を当て深く掘り下げた内容で、北九州会場にふさわしいものとなりました。



小林慎也氏



重信幸彦氏



## ●編集後記●

記念館は今年で開館七周年を迎えました。今年一番の出来事はなんと言っても推理劇場オリジナル映像の公開です。「日本の黒い霧」を題材とした映像で、迫力満点です。是非一度ご覧ください。来年もよろしく。(中野 吉明)

新北九州空港  
2006.3.16 OPEN

新しい空、新しい私。

